

普及活動情勢報告（平成19年11月分）

北川村久府付集落営農推進協議会の発足



北川村久府付集落では9月に集落座談会を開催し、将来の農村について検討していくことになり、農業振興センターが集落営農について説明をおこなった。そして、10月22日に集落の代表9名で集落営農推進協議会を発足させた。今後はこの組織が中心となって、効率的に集落ビジョンや実践計画を立て、地域住民の合意形成を推進していくことになる。具体的な活動はゆずの収穫が終わった12月から、集落全戸対象に「営農や集落の将来についての意向調査」から取り組みをする事になった。この活動がスムーズに進むように支援を予定している。

北川村久江の上集落が直販用野菜の展示実証を開始



北川村久江の上集落はゆず生産の盛んなところであるが、所得向上と高齢者対策のために直販用野菜栽培に取り組んでみてはどうかと提案したところ、稲作の農地に9月から試作を始めた。販売用野菜（カボチャ、レタス、ブロッコリー等）を栽培するのはこの地区では初めてであり、集落リーダーから指導の希望が強く、10月30日に現地の巡回指導を行った。さらに寒さ対策として農業資材を提供し展示実証ほを設置をするように働きかけた。結果、3名が取り組む事となり、ゆずの収穫が終わる12月、1月に集落で講習会を開催することとなった。

ハスイモ現地検討会・部会の開催



室戸市では、5名の農家で70aのハウスでハスイモが栽培されている。10月31日、5名全員が参加し、各自の圃場を巡回して生育状態とこれまでの管理について意見交換をおこなった。なかには、7月下旬～9月下旬に定植したハスイモが人の背丈より高くのびているハウスもある。農業振興センターは現地実証圃の調査データを示しながら今後の管理についてアドバイスした。その後部会が開催され、スチロール箱による試験販売の結果が示され、鮮度保持、店頭での清潔感が好評であったことから、ハウス栽培は周年スチロール箱により出荷を行うことをきめた。また、東京、大阪の販促活動の報告があった。「これ何？」、「どのようにして食べる？」との反応が多かったことが報告され、消費宣伝の重要性をあらため確認しあった。

地元のユズのお勉強 ～北川小学校～



11月6日（火）2・3時限目を利用して地元の特産であるユズをよく知ってもらうために、3年生（5名）を対象に普及指導員が講義をした。2時限目はスライドを使って北川村にどのようにしてユズが入ってきたのか、またユズの栽培についてクイズ形式で応えてもらい、3時限目はユズの出荷場・搾汁場を見学した。家でユズの収穫を手伝ったことのある児童やお母さんがユズ加工場で働いている児童もいたが、さらにユズについて知識を深めてもらった。特に北川村でつくられたユズの商品について興味をもっていた。

安芸市青色申告会がＪＡ高知市生産経営部会と交流



高知「参加者も指導者も多くてびっくり」
安芸「ニーズが多すぎて応えるのが大変」

１１月１９日、ＪＡ高知市生産経営部会の６名が、安芸市青色申告会の活動について視察研修に来た。この日は中央支部の講習会が開催されており、参加者３５名が熱心に受講する様子を見学して貰った後、別室にて農業振興センター担当者から活動状況を説明した。その後は会長や事務局も交えて、互いの組織の課題や今後の取り組みなどについて意見交換を行った。

地域は異なるものの、同じ目的を持った組織同士で話し合い「青色申告会の活動は得てして簿記・税務に留まりがち。本来の目的を見失わない活動を続けて行けば自然に組織も活性化するはず。」という総意にまとまった。

女性リーダー経営研修会



ナス産地のまとまりを目指すリーダーを育成するために、研修会を開催した。最初に農業振興センター経営担当によるパワーポイントを使った講義「みんなで力をあわせて守ろう『日本一の園芸産地』」を行った。

その後の話し合いで「樹と話ができんといかん」「ナス反収１８ｔは努力したらできる」「早植えて土づくりができない」などの声があがった。必要生活費と目標収量の把握の必要性和、そのためにも経営や技術の研修に夫婦ともに参加し、家族で話し合い、情報を共有することの重要性を確認した。

ラベルをしっかりと守ろう～ＪＡ室戸支所キュウリ部農薬講習会より～



農薬講習会より

室戸のキュウリ農家９戸では、１１月から本格的な収穫が始まるが、適用外使用の防止等を図るために１０月２３日に農薬使用講習会（全戸出席）を開催した。

ＪＡ、振興センターから農薬使用上の注意事項、防除一覧、ポジティブリスト制度について説明し、改めて使用ラベルの厳守を意識づけた。部会員からは、栽培期間中での除草剤使用や混合殺菌剤の成分毎の総使用回数について意見や質問が出ていた。

前作はキュウリ黄化えそ病が多発しており、アザミウマ類への総使用回数に対しても、薬剤ローテーション、防虫ネット、粘着板、微生物製剤を活用し、効率的な防除体系を図っていく。